

P2-026

新型コロナウイルス感染流行前後のアルコール摂取頻度と摂取量の変化（ZRF study 第 28 報）

長濱さつ絵^{1,2}、堀愛³、道川武紘²、朝倉敬子¹、西脇祐司¹

¹全日本労働福祉協会、²東邦大学医学部社会医学講座衛生学分野、²筑波大学医学医療系国際社会医学研究室

【目的】新型コロナウイルス感染症流行によるアルコール摂取習慣の悪化の可能性に WHO や日本医師会から注意喚起が出る一方、世界では飲酒量が減少したとする報告もある。しかしながら、流行前後でアルコール摂取習慣の変化を検討した報告は少ない。今回、流行前後のアルコール摂取頻度と量の変化について報告する。

【方法】2018、19、20 年度に全日本労働福祉協会健康診断を受けた 20 歳以上の受診者を対象とした。健康診断問診票のアルコール摂取頻度（毎日、時々、ほとんど飲まない・飲めない）と一回あたりの摂取量（1 合未満、1～2 合未満、2～3 合未満、3 合以上）を用いた。2019 年度の摂取頻度毎に、20 年度の摂取頻度の割合を算出した。摂取量についても、頻度・摂取量毎に同様に算出した。コロナ感染流行前（2018 年度から 19 年度）についても同様に算出した。

【結果】男性 218,692 人、女性 112,508 人を解析対象とした。毎日飲む人、ほとんど飲まない・飲めない人の 1 年後の飲酒頻度は感染流行前後で差がなかった。時々飲む人は一年後、ほとんど飲まない・飲めないと答えた人が流行後に増え（流行前：男性 9.6%、女性 12.9%、流行後：男性 11.6%、女性 16.5%）、時々飲むのままの人は減っていた。毎日飲む人の摂取量については、感染流行前後で差がなかった。時々飲む人とほとんど飲まない・飲めない人では、流行後のほうが翌年の摂取量が減っている人が多かった。

【考察】本研究では、コロナ感染症流行後のアルコール摂取習慣の変化は感染症流行前とほとんど変わりがなかった。時々飲むと答えた人では感染流行後に飲酒頻度・摂取量が減っており、外食や飲み会の頻度が減ったことが影響している可能性が考えられた。